

ミャンマー人にとっての「デモクラシ」とは

最近、デモクラシーについて古典といわれている文献を改めて読み直している。いつものことだが、デモクラシーとは何か、民主化とは何か、自分なりになかなか整理できない。しかし、今回、遅まきながら明確になったことがある。それは「デモクラシー」については、『自由』『平等』がキーワードとなるものの、地理的、歴史的、文化的状況を抜きにして議論しても実り少ないということだ。

トクヴィルは、アメリカ合衆国で民主共和政の維持に役立っている原因について三点ほど指摘している。第一は、アメリカがおかれている特殊、偶然的状況。これは、風土とか環境とかといった言葉に言い換えても良いかもしれない。それに加えて第二に法制、そして第三に習慣、習俗が続く。第二の法制についてはあえて説明を加える必要はないが、第三の習慣、習俗は、歴史的に形成されてきた独自の文化と言い換えることができよう。そして彼が一番重視しているのは、まさにこの第三の要因である（参考文献）。

一九八八年八月に最高潮となったミャンマーの反体制運動では、「デモクラシーの獲得」が当初から訴えられていたわけではなかった。ネーウィン政権打倒は叫ばれていたものの、三月事件の真相究明、逮捕された学生の釈放と処分撤

回などが、八月に至る主な要求内容であった。七月のネーウィンの辞任をうけて登場したセインルイン政権下では、「セインルイン辞任せよ」が人々の叫ぶスローガンであった。「デモクラシーの獲得」というスローガンが登場したのは、彼の辞任以降のことである。しかし、「デモクラシ」（ミャンマー語では英語をそのまま用いている）という言葉が、最終的に運動のメインスローガンとなった点は重要である。「デモクラシとは何か」という問いが、初めて国民レベルで意識されるようになったことを意味する。そして世界的・長期的にみて、それを求める流れは、ひとたび始まると逆行することはない。

しかし、問題は、ミャンマーの場合も、「デモクラシ」はその風土や歴史・文化に規定された方向で展開せざるを得ないという点である。「自由」や「平等」という概念ひとつをとってみても、ミャンマーの人々が考える「自由とは何か」「平等とは何か」を、まず明らかにしていく必要がある。そうした問いを出発点にしながら、ミャンマーにおける「デモクラシ」の現状と今後の展開を丹念に追っていく作業が大切ではなからうか。

《参考文献》

●トクヴィル「二〇〇五」（松本礼二訳）『アメリカのデモクラシー 第一巻（下）』（岩波文庫）岩波書店。

いの けんじ

現在、北九州市立大学地域創生学群教授。1959年生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士（社会学）。1998年3月～91年2月、在ミャンマー日本大使館に専門調査員として勤務。